

低温熱傷（低温やけど）とは？

I. “やけど”はどんなケガ？

やけどは医学用語で熱傷ねつしょうがいといい、ヒフや粘膜ねんまくが主に熱で傷害されたケガです。やけどの重症度じゅうしやうどは温度と接触時間せつしよくじかんによって決まります。高い温度、長時間ちやうじかんの接触ほど、深く重症じゅうしやうになります。熱が高温なら短時間の接触でやけどになりますが、短時間の接触では問題にならない 44℃～50℃程度でも長時間 接触しているとやけどになり、これを低温熱傷ていおんねつしょうといいます。

II. “低温熱傷”の原因は？

低温熱傷の原因は、湯たんぽや電気あんか、電気毛布、使い捨てカイロなどによるものが多い印象です。下腿かたい（膝から下）や足に多くみられ、寝ている時や体が動かせない時にケガをすることが多いです。

III. “低温熱傷”の症状は？

やけどは浅い方から深い方へ、Ⅰ度（赤くなりヒリヒリする）、Ⅱ度（水ぶくれやただれ・出血しゅっけつがあり、痛い）、Ⅲ度（白っぽく、硬く、痛みがない）と重症度じゅうしやうどが分けられます。気がつかずに長時間熱に接してしまうため、低温熱傷は深いやけど、Ⅲ度となりやすいです。痛みを感じる神経しんけいが熱で傷害しょうがいされると、深いのに痛みがなくなります。痛くないからと、軽く考えないようにしましょう。

III. “低温熱傷”になったら？

なるべく早く医療機関いりようきかんで診察しんさつを受けることをおすすめします。重症ではなくても、正しく管理できないとキズが化膿かのうすることがあります。診察までは、石けんやボディソープの泡できれいに洗い、水道の流水で十分にすすぎ、清潔なガーゼなどで保護ほごしましょう。小さな低温熱傷でも、何ヶ月も治らないことや、手術になることも珍めずらしくありません。こじらせる前に皮膚科や形成外科の専門医じゅしんを受診じゆしんしましょう。

IV. “低温熱傷”を防ぐには？

同じ体の部位を、暖房器具だんぼうきぐに長時間触れないようにしましょう。寝る前に湯たんぽは布団ふとんから出す、電気製品は電源でんげんを切るなどしましょう。